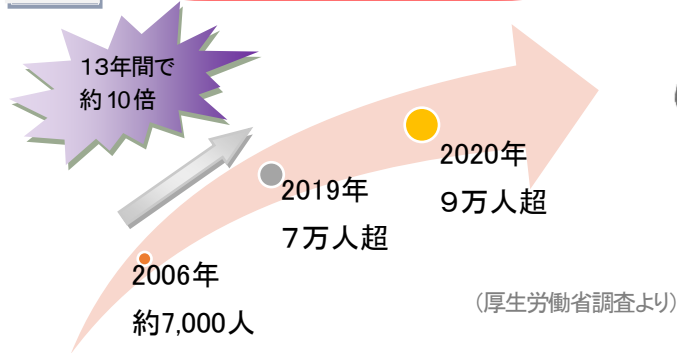


検証

発達障がいで、最近、増えているの？



『発達障害と間違われる子どもたち』

著者：成田 奈緒子（1963年、仙台市生まれ。神戸大学医学部卒業、医学博士。米国セントルイスワシントン大学医学部、獨協医科大学、筑波大学基礎医学系を経て2005年より文教大学教育学部特別支援教育専修准教授、2009年より同教授）

発行：青春新書インテリジェンス 価格：1,155円

目次

- 第1章 「発達障害と間違われる子」が増えている
- 第2章 「発達障害もどき」から抜け出す方法
- 第3章 睡眠が子どもの脳を変える
- 第4章 親と先生のスムーズな連携が、子どもを伸ばす
- 第5章 子育ての目標は「立派な原子人」を育てること



「発達障害もどき」とは？

集団行動ができない
コミュニケーションがうまくいかない
集中力がないミスや忘れ物が多い
相手の話を聞いていない……etc



発達障害と類似した症候があり、医師に相談しても、必ずしも全員に発達障害の診断をつけられるわけではありません。「発達障害の診断がつかないのに、発達障害と見分けのつかない症候を示している状態」を「発達障害もどき」と、著者の成田氏は呼んでいます。

また、本来、発達障害と診断できるのは、免許を持った医師だけですが、最近は保育士さんや幼稚園の先生、学校の先生から「発達障害では」と、「プレ診断」を受けるケースが多々あります。このケースも、「発達障害もどき」の一つと定義しています。

特別支援教育の必要性が世の中に広まり、特に保育園や幼稚園、学校現場では発達障害に関する研修も充実し、多くの方が発達障害の知識を持つようになりました。その結果、このケースは増えているように感じます。……とのこと。

脳の成長バランスが崩れると「発達障害もどき」に

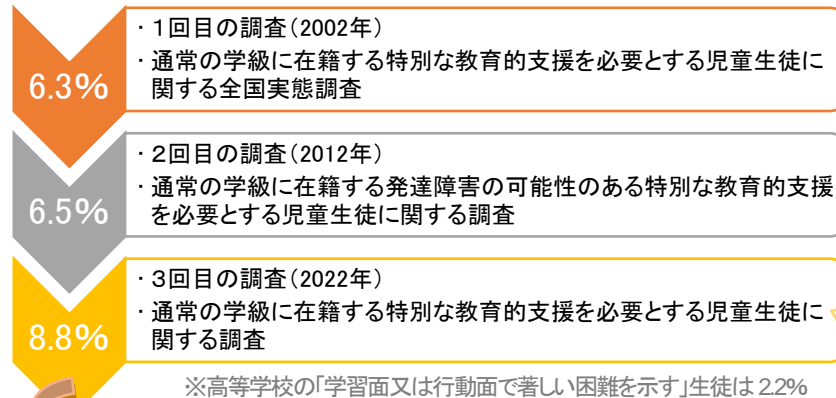
睡眠リズムを整えるなど、生活の改善により、行動が劇的に変わることも。

- (1)からだの脳の育て直しができ、脳のバランスが整う
- (2)セロトニン神経を育てられる
- (3)睡眠が安定する

発達障害もどきの子でも、言動がみるみる変わっていく。

発達障がいの人はもちろん、「発達障害もどき」であったとしても、生活に支障があり、本人が困っているのは事実。家庭でも学校でも、必要な支援の在り方を考えたいですね。

学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒(小中学校)の割合



これを踏まえて 通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援に係る方策について(通知)

- 具体的には、
- ・校長のリーダーシップの下、特別な教育的支援を必要とする児童生徒の実態を適切に把握し、適切な指導や必要な支援を組織的に行うための校内支援体制を充実させること
 - ・児童生徒が慣れた環境で安心して通級による指導を受けられるように自校通級や巡回指導をはじめとする通級による指導を充実させること
 - ・通級による指導を担当する教師等の専門性の向上を図ること
 - ・高等学校における通級による指導の実施体制を充実させること
 - ・特別支援教育に関する専門的な知見や経験等を有する特別支援学校における小・中高等学校等への指導助言等のセンター的機能を充実させること
 - ・よりインクルーシブで多様な教育的ニーズに柔軟に対応するため、特別支援学校を含めた2校以上の学校を一体的に運営するインクルーシブな学校運営モデルを創設すること
- などについて提言されています。